

米沢市塩井の昔話

編 武 田 正

米沢市塩井の昔話

付 米沢市田沢の昔話と伝説

目次

米沢市塩井の昔話

付米沢市田沢の昔話と伝説

編 武田 正

1	むかしとはなし	五	15	蛇 罎	三五
2	オッタンタカ鳥	五	16	猿 罎	三六
3	オタタカ鳥	九	17	和尚と小僧 — プウプウ・パタパタ —	四二
4	テロロ―鳥	一〇	18	和尚と三人の子ども	四四
5	かつこ鳥	一一	19	南の山の馬鹿息子	四七
6	十二支ばなし — 動物の役目 —	一二	20	南の山の馬鹿	四八
7	茗 荷	一四	21	屁たれ嫁	四八
8	笠地藏	一五	22	馬鹿殿さま	五〇
9	虎猫の恩返し	一九	23	あけびの話	五一
10	クシの化けもの	二四	24	朝 茶	五二
11	桃太郎	二五	25	白い水薬と赤い水薬	五四
12	瓜姫子	二八	26	阿平南の話	五四
13	こぶとり	二九	27	お恵比須さま	五七
14	ねずみ浄土	三一	28	のろのろ話	六一

29	狐に化かさつだ話	六一	37	お文殊さまと宿借り普賢	七六
30	狐に化かさつだ話	六四	38	塩井の弘法さま	七七
31	狐の鳴き声	六七	39	中田の石芋	七九
32	狐むかし	六八	40	美女塚と美男塚	八〇
33	お彼岸	七〇	41	鬼面川	八一
34	彼岸のわか	七〇	42	お葉山	八二
35	鬼子母神	七二	43	狐つき	八三
36	オタナサマ	七四			
米沢市田沢の昔話と伝説					
1	蛙と猿の寄合餅	九四	8	姥捨	一〇八
2	不洞沢(伝説)	九八	9	南の山の馬鹿息子	一〇九
3	大師山(伝説)	九九	10	まま子いじめ	一一〇
4	田沢の七不思議(伝説)	九九	11	猿髯入	一一二
5	八谷の金掘り(伝説)	一〇一	12	藁しべ長者	一一四
6	魚女房	一〇二	13	朝日太郎	一一五
7	蛇退治	一〇五		あとがき	一二六

凡 例

- 一、昭和48年8月の米沢市塩井地区の調査及び同年9月の米沢市田沢の関場家の調査の際のものである。
- 二、昔話は語りをテープからそのまゝ移したものであり、伝説もなるべく語り口を大切にしました。
- 三、語り手及び塩井公民館長はじめ渡部勉主事職員の御協力を得た。
- 四、調査は置賜民俗学会として実施したものである。

1 むかしとはなし

あっちの方から、「むかし、むかし」て来て、ほれから、こっちの方から、「はなし、はなし」て来たなよ。

んで、その真中には、大きな橋あつてよ、その橋の真中で、むかしとはなしぶつつかったなよ。ほして、ぶつつかつてはあ、パアンてはあ、割つてしまったなよはあ。どろびんさんすけ。むかしはむぐつで、はなしははじけてなくなつたなよ。こんでおわり。

(平田幸一)

2 オツタンタカ鳥

むかしあつたけど。

あるところに、仲のええ兄弟二人ぐらしの家あつたんだそうだ。兄は、ほだけ

んど体が弱くて働けなくなつてしまつたど。んで、弟が兄の分も働かなければ食えないというわけで、毎日々々、田んぼに行き、山に行ったりして、またあるときは町に行つて、うまいもの買つてきて、ほして、兄に食せて、何とか早く治つてもらいたいという感心な弟であつたど。

ところが、ある日兄がふと、

「おれにこんなうまいもの、毎日々々食せてくれる感心な舎弟だな」

と思つたげんども、ふと悪い気が起きて、

「おれにこんなにして食せることには、舎弟なのなんぼかうまいもの食つてんなでないか、一ぺん見てみたいもんだ」

と言うわけで考えておつたが、仲々見つける折がなかった。

あるとき、その昼休みしたとき、兄がふと、「よし、こん時にこそ見てやろう」というわけで、刀を持って弟を殺してしまつた。そうして腹をさいて見たところが、

「いやいや、うまいものどころか、とてつもない」

全く人間の食えるものでないようなものばかり、芋の皮だとか、あるいは木の芽だとか、本当にひどいものばかり食っておった。その時に兄は、

「いやいや、とんなことをしてしまった。こんなことだったら、殺すでなかった。

何という、おれも浅はかな考え起したもんだろう。これほどまでおれを思つて働いてくれんのに……」

て言うていた。そんな時に、神さまが、

「お前は、とんなことをしたもんだ。人間としてなすべきことでないことをしてしまった。罰を与える。制裁を加える」

として、鳥にしまった。一羽の鳥にってしまったて、それがホトトギス、つまりオッタタカ鳥と鳴かんね鳥である。オッタタカ鳥は、

「お前が朝から夕までに、一日のうちに八千八声鳴かない限りは決して餌を^も食べなくてはならないぞ」

ということを神にいましめられて、「ああ、悪かった、そうする」と、弟に詫びなくちやなんないから、いくらひもじい思いをしても、八千八声鳴いて、その後

食べることにするということを神と約束した。それで朝は明けるが早い、オッタタカ鳥、オッタタカ鳥と、木から木へ飛び廻って歩き、暑いのに寒いのに、そうして喉から血が吐き出すほどにも鳴き叫んでいた。

夕刻になると、立派に「オッタタカチョウ」と鳴けずに、「オタタカチョウ、オタ、オタ、オタタカチョウ」というような鳴き音しかできなくなってしまった。それを見ておったモズが同情して、

「あれでは困ったことだろう、モノの食べる閑がないじゃないか」

と、可哀そうだ、いつか声の止んだとき、食べられるだろうといって、青蛙やケラコなどをとって、枯木の先に刺しておくのだ。んで、お前たちも、よくこういうことも見当ることもあるだろう。それがモズの同情から、ホトトギスに食せようという友人愛だそうだから、決してそれは取ってなんねぞ。どろびん。

(平田幸一)

3 オタタカ鳥

仲のええ兄弟だったど。

弟の方は稼ぐので、山芋掘つて来ては、煮て、兄の方さええどこばり食せて、自分はアマクビばり食つて、毎日食せつだげんど、兄は根性悪れくて、

「おれにさえ、このようないえどこ食せるな、自分がなんぼうまいとこ食つてたんだか」

どて、殺してみたって。殺して胃の中さいてみたら、アマクビばり食つていたつたど。神のいましめで、

「お前のような根性の悪れ者は、このような心のやさしい舎弟を殺すような者は、オタタカ鳥になつてしまえ」

て言わつだつてよ。そして、

「お前のようなものは、八千八声鳴かねうちは、餌^{もの}一口も食べらせらんねから」
て言われて、

オタタカ鳥　オタタカ鳥

オトト　恋し

て鳴いたもんだと。

山さ行ぐど、柿の木びつきの梢などに蛙などささつてゐる、それはモズがオタタカ鳥ば可哀そうだと思つて餌をさしてゐてくれるんだと。

(高橋)

4　テロロー鳥

大したきれいな奥さんが、何にもしないで、赤い衣裳着て、毎日遊んで馬飼つてだ家だつたども、馬さ水もやるもしねで、赤い衣裳きて遊んでばりいたど。

馬は喉かわいて、喉かわいて、死んでしまつて、その馬のたたりで、奥さんはテロロにさつでしまつて、赤い着物きて、雨水でないじど、飲まんねことさつじやんだと。

「テロロー鳴くから、雨降んぞ」
なて言うたもんだ。

(高橋)

5 かっこ鳥

親不孝者の息子が、おかあさんが背中さ、かゆいもの出たから、かいで呉ろて言うたらば、

「そんなもの、かいで呉らんね」

て言うて、跳ねて出はって遊びに行ってしまった。何ともかゆくて切ないもんだから、川端さ行つて、岩の上で背中こすっているうちに、濁流にまくれ込んで死んでしまったど。

おかあさん かっこよ

おかあさん かっこよ

て鳴くのだど。かつこ鳥になって鳴くのだど。

(高橋)

6 十二支ばなし — 動物の役目 —

むかしむかし、ある時に、天の神さまが、この広い世の中に住んでる動物たちに、いつのいつか、何時頃までに、お前たちがわたしの傍まで来い、位を授けるということをお告げになった。すると動物たちは神さまから位もらえつこんだらば、

「おれは一番先に行つてやる」

「おれだ」

と、みんなが行く日を待てわびていた。ところが牛は、

「おれは足はのろいし、今からにも歩いて行かなくちや、神さままではその日に行けないから、今日から出だそうかなあ」

て、そして牛は出たそうだ。そのうちに、ねずみが出てきて、ねずみは賢いので、牛の背中にひよいとのおつて行つた。

「これは、くたびれもしないし、楽でええ、牛は賢いし、物覚えもええから、牛だら間違ひもない。おれ、牛の背中さひよこんとのおつて行くべ」

その次にいろいろな動物来た。その次に猫が来て、みんなに聞いたげんど、誰どて猫に教える者がなかつた。

「おれ、忘れてしまつた。何日だつたけがなあ」

て、教えねわけだ。牛にのつてねずみが出だしたもんだから、聞いてみた。ところが、ねずみも教えねがつた。

「おれも知しやねなよ。んだげんども、ちよつと用達しに行つてくるもんで、牛にのせてもらつて、これから出だすぞこだ」

そして、天の神さまのそばまで牛は行つて、

「ああ、やれやれ、来たな、天の神さま」

て、いたところが、ねずみはそれより早く牛の背中からポンと降りて、神さま

の前さ一番先に行ってしまった。すつどねずみは一番先に、牛は二番目になってしまった。三番はトラ、四番はウサギ、タツ、ヘビ、ウマ、ヒツジ、サル、トリ、イヌ、イノシシ、と十二匹の動物が、まず、天の神さまから位をさずかり、
「あなたたちは、これから人間の世界に行つて、日を守り、月を守り、年を守つてやりなさい」

ところが、猫はその中に入ることができないがったど。それで今でも猫はねずみに聞いたとき教えてもらえば、猫も入れたのに、

「あの野郎、おれに教えずみで、一番先に行つた。うまくない野郎だ」
で、今になつても猫はねずみをねらっている。どろびん。
(平田幸一)

7 茗 みよう 荷 が

その人くらい物忘れする人いながったど。その人死んだとき、埋いけた塚に一本

の草が出て来たど。

「こりや、何だべ、一体……」

て、不思議にして、みんな、そこの世間の人きて、

「妙だな、こりや、妙だな」

て、みんな眺めたど。それで「茗荷」となったんだど。あれ食うど、物忘れする。んだから、あれを赤子（おぼこ）にあんまり食せんよ。
（平田幸一）

8 笠 地 蔵

あるどこに、じつちやとばつちやが二人きりで生活したど。

なんぼ働いても、年寄りのことで、ほだえ裕福な生活できなかった。まず、大晦日のことだったが、

「じつちや、じつちや、正月も来たことだから、何か買ってお年取りしんなね、

んねが」

という話を二人でして、じつちやは、

「それにしても金もない、困ったことだ。んだげんども火も焚けない。んだから、炭の一俵も買ってこようかな」

というわけで、

「クキナ湯でものもんで、したことにして寝られるんだから」

というわけで、町へ出かけてた。ところが、途中に地藏さまが雨に打たれて立っておつたど。じゃんじゃん雨は降ってくる。その中をじつちやが行って、

「はて、炭買うのだが、あの地藏さまはあわれだ。この雨の降る中に笠もかぶらず、ああして雨に打たれて、地藏さま、かわいそうだから、炭など買わなくともええ、笠一蓋^{いっがい}買って行つてかぶせて行んなあ」

というわけで、笠一蓋かつて地藏さまの前に行つて、

「地藏さま、地藏さま、笠買ってきたから、これで雨しのぎなさい」

ていって、家さ帰つたど。

ばんちゃは何買ってきたと思って、待っていたけれども、何一つ買ってこない。

炭ということも言ってやったんだが、炭一俵買ってこなかったど。そして、

「実は、こういうわけで来つどきに地藏さまに、かなりあわれなもんだから、笠一蓋買つてかぶせてきたもんだ。仕方ないから、今夜はまず火でも焚いて、クキナ湯でも飲んで寝んべはあ」

「いや、ほだごでなあ」

「仕方ないごで。銭もないべし、買わんねも。そうしんべなあ」

というて、二人が床の中に入ったど。

そうしたところあ、夜中になつて、

「じじあ家あどこだべな、ばばあ家あどこだべな。まだあつちだべ」

というて、あまたの者が、ダイモチを引いてきたど。

「ああ、ここだ、ここだ。じじあ家あここだ」

て、玄関先さ来て、ドシンと落して、後は帰って行つてしまつたど。じじとばは、またすっかり眠もやらすいたので、何だろうと思つてみたところあ、すば

らしい大きな荷物がある。玄関先におかれてあつたど。それを二人で開けてみたところあ、炭から米から金から、たくさん入つておつたと。

「はて何だろう。ふしぎだ。いやいや誰かがおれにめぐんでくれたんだ。ばばちやよ。これはたしかに地蔵さまの、あいつであんまいか、炭買おうと思つて家を出て行つたんだが、笠を買つた。その炭も米もある。錢もある。たしか地蔵さまだ」というわけだ。また二人でもつて地蔵さまさ行つて、ええ年とり迎えたけど。そしてこんどじつちや、炭も出たもんだから、ユルリさどんどん起して、ほして当つてねんべはあというていたところあ、ユルリの隅すまこから、

「いやいや、ずいぶん長く住んでいたげんでも、こがえなどこにいらつじやもんでない。早く出て行くべぞはあ」

て行つて、出だして行つた。それは貧乏の神が長年住みついていたのが、火どんどん焚かれたためにいらんねぐなつてしまつて、出て行つてしまつたんだど。それから、じつちやとばつちやは裕福な、仕合せな年を迎えたという話だ。どろびんけんすけ。

(平田幸一)

9 虎猫の恩返し

あるどこに、貧乏な寺で、ようやく食ってるのみの尼寺あったそうさ。

ところが、夕方、寺の門を叩くものがあつた。和尚さんは、誰だろう、何だろうと思つて、玄關まで出たところが、立派な人が、

「今、そこで、とんな誤あやまちしてきた。何とかして助けていただきたい」

見れば腕やら足やら、かなりな傷を受けておつた。和尚さまは事あるかと思えば、

「いやいや、それでは全くひどいだろう」

と、なかなか慈善に富んだ和尚さまなるがゆえに、

「さあさあ、さあ、すぐ上がりなさい。それでは困つただろう」
て、家に寄せて、腕を組んで、

「さて、どうしたらば、早く治るだろう」

といつて、もう薬はなし、和尚さまもハタと困つて、考えておつた時に、その

傷を受けたお客さんが、

「実は新小豆をゆでて、その汁つゆをつけて、たでれば（浸す）、これは造作ぞうさなく治るんだげんどもなあ」

ということを言った。

「はあ、そうか、そうならば小豆を家にはないげんども、その隣近所たねて来くべ」

和尚さんはすぐ用意して出でした。その時にまだまだ新小豆が出る時期ではなかつた。十軒二十軒と数廻かずつて、和尚さんが何とか治してくれたので、したら、運よく一軒の家で新小豆を求めることができた。さつそく寺に帰つてそれを茹ゆでて、その汁で、たでてやったら、間もなく傷は後かたも無くなつた。お客さまはたいへん喜んで、

「いやいや、とんな（大変）おかげさまで、傷もすっかり治つたし、これでは帰る。今夜一晩、ごやつかいになろうと思つたげんども、ここでおいとまさせていだだこう」

ていうわけで、御礼釈して出ようとした時に、

「だが、いつの何日いつか、私も忘れない、いつの何日、どこそこで殿さまのお葬式があるから、その時に和尚さま来ていただきたい。私がその棺を天高く吊り上げつから、和尚さま、どんな和尚さまがありがたいお経を上げてくれたって、宙に浮いて、下には置かない。んだげんども、助けてもらったありがたいそのお礼として、和尚さまが私の名を呼んでくれたなら、さっそく、棺はおろします。これだけは忘れないで、一つ、私の恩返しとして言うて行きます。私の名前はトラといいます」

ていつて、出るときにはもう人間ではなくて、大きな虎猫であつたど。和尚さんも、

「さてさて、猫であつたか、猫は魔物というが、はたしてそれが本当であるかいなや、その日に行つてみよう」

といつて、当日行つてみた。

ところが、殿さまの墓地に行つて見ておれば、向うから蓮台にのせられた殿の

棺がおごそかにやって来た。周囲にはいろいろな袈裟を着て、きらべかしい立派な和尚連中が数知れず集ばってきて、「ありや」て、椽台の上に棺を置くか置かないうちに、なるほど、棺は天高く上げられてしまった。

「さては本当だ」

て、なあ、和尚も、これでは嘘ものではない、自分はうたぐってはみたけれども、自分はすぐ出てはいけない。

したうちに、和尚連中に、みなお経を上げ何とかしてそれをおさえようとしたが、棺は依然として変らず宙に浮いている。その時に、かの和尚が、

「どうか、私に一つお経を上げらせていただきたい」

といって、願い出たが、そぼの者は、見ればオンボロ、サンボロの袈裟・衣・こんな和尚が何お経あげだって、元に坐るもんでない、身成りは粗相で、みんなが許してくれなかった。

「近うまいれ」

と和尚を出し、「お前がお経を上げっだいっていう、これでは困ったから、一つ

たのむ、お経を上げてくれ」

て、たのまつで、和尚は棺の前、掾台の前に立つて、まず第一に私を呼んで呉くろ
という虎猫との約束があつたので、大声で、

トラ ニヤアニヤア

トラ ニヤアニヤア

トラ ニヤアニヤア

と三べん、まず詠よんだ。それに、虎猫は聞こえたものか、

「ナム、ホリヤ」

というて、後の経をあげてうちに、宙に浮ிட்ட棺が、ツウツウ、ツウツウ
と下がってきて掾台の上にぴたっと降りてしまった。そうすると、和尚もおど
ろき、殿の身内もおどろきにおどろいてしまつて、

「あの和尚は、ただの和尚でない、近う呼べ」

という言葉がかかった。呼ばれて行つて、「お前はどこの住職だ」と聞かれたと
きに、「尼寺の住職である」

「その身なりは……」

「実は食うにも食えない、檀家も少なく、ただし、昔の寺を守らなくちや、先祖を守らなくちやと思つて、毎日こうしてお経の詠み続けやっているんだ」

て言うたところが、殿は、

「しからば、こんどその恩返しに食えるようにしてやろう」

と、檀家をあたえ、立派な寺にしてやつたど。それは今では、すばらしい立派な寺で、有名な寺になつてあるど。どろびん。

(平田幸一)

10 クシの化けもの

あるとき、夜になつど、

「キリキリ虫は鳴くぞ、あしたの天気はええぞ」

て鳴い^いつたど。その化けものをゴロビツ(唐戸)さ入^いつて寝たところを、フタ

して、キリでもつてもむと、

「キリキリ虫あ鳴くぞ、あしたの天気はええぞ」

て鳴いっただ。

そしてこんど、いよいよキリで孔あけて、そこさ大鍋さお湯わかして、孔からお湯をそそいだ。ドンドンと。そして蓋あけて見たところあ、化けものはクシ一枚だったど。クシの化けものだったど。んだからクシさあ、人の踏まれっどこさ置くとか、やたらにそこらさ投げておくなつて、年寄り衆は言うてたもんだ。どろびん。

(平田幸一)

11 桃 太 郎

まいどなあ、あるところに、じじとばばと暮していだつたどなあ。

そして、じさま、山さ柴刈りに行つて、その留守に、ばばあ川原さ洗濯に行つ

たどなあ。そうしたところに、向うから大きい桃のきれいな流つて来たもんだがら、その桃拾うとき、

赤い桃 こっちやこい

白い桃 あっちや行げ

赤い桃 こっちやこい

白い桃 あっちや行げ

て、手まねきして、そして赤い桃がばの前さ流つて来たな、洗濯しねで、赤い桃拾つて来たど。

そしてるうちに、じさま柴伐りに行つたな、背中さ背負つて帰つて来たど。そしてば、

「じさま、じさま、川原さ洗濯に行つたらば、大きい桃流つて来たけがら、拾つてきた。見ろ、まず」

そしたら、じさまが、

「なんぼうまいんだか、割つて食つたら、ええがんべ、ばさま」

ていうたど。そしてばさま包丁もつてきて、包丁あてたば、パカーツと割つて男おぼこ出来たど。そしてその男おぼこ、大事に育てて大きくしたど。

大きくして、「その名前、何とつけたらええんだかなあ、じさま」
で、じさまに相談したば、

「桃から生まつじやから、桃太郎と名付けたらええんねが」
て、ばさま言うたど。そしたば、じさま、

「そいつあ、ええ名前だ」

て、桃太郎と名付けて、大きくして、鬼が島さ征伐に行くようになったど。そしてこんどは、犬と猿とキジとお供に連れて、犬にキビダンゴというもの、粉はたいて拵こしらって行かねじど、食うものないじど仕様ないんだからって、団子こさつて鬼が島さ征伐に行つたど。そうしたところが、ええあんばいに稼いで、桃太郎は大勝利したつたどなあ。

んだから人間というものは、立派に堅く育てらんなねし、育って行かんねもんだごでなあ。どーびん。

(相田)

12 瓜 姫 子

おじいさんとおばあさん、子持たずで、瓜から生まった瓜姫子を育てて、

「帰ってくるまで、決して戸開けんよ」

で、じっちやとばっちや、出かけて行っただご、天邪鬼きて、

「ちいと開けてくろ、戸、ちいと開けてくろ」

て言うもんだから、その戸開けたれば、天邪鬼寄ってきて、その娘殺して自分がその娘の着物きて、機織っていったど。

そしたら、鳥がきて、

瓜姫子のハタに

天邪鬼 ぶちのって

キーコ パタン

で、鳴いて教えたんで、じっちやとばっちや、娘殺さったの分ったので、怒って天邪鬼殺さったど。ススキの原にぶんなげたので、萱の根っこ赤いんだど。

13 こぶとり

山さ、おじいさん、柴刈りに行つたど。ほうしたれば山暗くなつて、お雷さまで、岡立ち（雨）で、おじいさんがどこさ行つたらええか分かんなくて、うろうろていたらば、大きな松の木にホラ穴あつたど。そこさしゃがんでいたらば、コブじいさんの前に、猿共いっぱい来て、そうして踊りおどったり何かして、一生けんめいできて、今度猿に見つけらつじえ、

「じいさん、じいさんもはまれ」

なて、びりびり引っぱらつて、おじいさんが踊りも上手だし、にこやかな顔してるもんだから、はまれなて言わつてはまつたど。ほうしてこんど、夜明けける頃、

「おじいさん、そのコブ、おれもらつて行くべ」

て、ここがら、ガワーツと取らつじやど。そうしてきれいになつて家さ帰つてきたど。ほうしてこんど、おばあさんに、

「なんだべ、じいちゃん、その顔きれいになつたもんだ」

て、婆にもうんと喜ばっじやど。そうしているうちに隣のばあさんが来たど。

「なんだ、こっちの家のじいさん、きれいになったこと、なじよした」

なて言うど、正直じいさん、ばあさんもんだから、細かにみな教えたど。ほうしたら隣の欲ふかじいさん、

「ほんじゃ、おれもそういう風にすんべ」

なて、そして行つたど。その欲ふかいから顔さまで現われるもんだから、踊りさはまれて言わつて、はまつたげんど、踊り下手だべし、歌は下手なもんだから、

「こがな、じじい、分かんね」

「コブ、いま一つ呉れんべ」

て、隣のじじいからとつたコブ、ビダンとくつつけらつて、両方のコブになつたど。

んだから、意地悪ばりするじいさんは、罰当つて、コブくつつけらつたんだから、お前だ決して意地わるいことさんね。どーびんと。

(伊藤せう)

14 ねずみ浄土

むかしあつたけど。

おじいさんとおばあさんがい、おじいさんは山さ柴刈りに行った。そうしたら、おじいさんが昼間になったもんだから、おにぎり、おばあさんがうまく作って呉つじやもんだから、じいさんが楽しみにして、そのおにぎり食つていたら、そのおにぎりだよ、コロコロンと転んで行つたんだ。そうして転んで行つて、あらと思つて追つかけたら、その大きいねずみ孔あつて、そのねずみ孔さ、コロコロンと入つて行つたんだ。そして入つて行つたら、

「いや、とっても聞いたことのない、ええ音したもんだ」

て行つたのよ。はい、まずええ音に恋れて、おにぎりみなコロンコロンと落した。いや、きれいな音すつずもよ、んだもんだから、おにぎり食ねでみなそこさ入つてやつたなてよ。

「ああ、こんどなくなつたなあ、こりや」

なて、おじいさんが言うていたらば、

「んじや、おれ入って行ってみつか。あがえにきれいな音立てつどこさ、おれも入ってみつかなあ」

なて、おじいさんがねずみ孔さ入って行つたど。そうしてこんど行ってみたらば、ねずみの世界で、きれいできれいで、奥の座敷の方がめたらば、床の間の上に、宝物、ねずみ引いてきたんだか何したんだか、宝物いっぱい上がっていったど。そうしてねずみ共いっぱいいて、

「あら、おじいさん、ただいま、ありがとう。何も食べないでいたもんだから、腹うんと減っていたどで、ええどこさおにぎりころんできたもんだから、みんな喜んで分けて食ったぜはあ」

て、ねずみ言うたてよ。そしてこんど、

「おじいさん、ここ、ねずみの国だげんど、ええどきはいっぱい泊って行っておくやい」

て言うなだど。ほうして、おじいさんも、おばあさんが待っているもの、そが

えにおれも安態して泊っていらんねと、まず、底芯からうんと心配したと。そうしてなんぼ泊ったんだか、二つ三つ泊って、御馳走になって、ねずみの踊り見せらつで、うんとあつかわつで、一日だか二日だか、おじいさんが忘つたほどだった。そうして帰りに、「帰る」て言うたらば、

「ほんじゃ、送って行んから、目くついでみる（つぶつていなさい）」

て言わつで、目つぶつていたば、また元のどこの山のねずみ孔の傍さ送つて来たど。そうして、そのおじいさんが宝物いっぱいもらつて、おばあさんさ帰つて行つたど。そうしたらば、おばあさんが心配して青くなつていだつたど。まず帰つて来ないもんだから、そしてこんど土産・宝物いっぱいもらつて、

「こかえもらつて来た。お前におにぎりうまくこさつてもらつたもんだから」

て、おじいさんがいろいろ話してよ、おじいさんとおばあさん喜んでいたどこさ、隣のおじいさん来たど。そうして隣のおじいさんがおばあさんにおにぎり握らせて、ねずみ孔どこだの、ここだのて聞いて、そしてそのどこさ、おにぎり落してやつたど。ほして、おじいさんに聞いたように、ばらばらおにぎり早く落

して、おじいさんが落ちて行つたど。そしたらやつぱり見たらば、床の間でも、そこらでも、宝物、とつてもええ物いっぱいあるもんだから、その隣の欲ふかおじいさんが、

「あの、こがえに宝物いっぱいあるもの、ねずみだもの、猫のまねしたらば、ねずみ、みな逃げて行つて、この宝物をおれすつかり持つて家さ帰られんべ」

と思つてよ、ほうして、ニヤオニヤオて猫のまね、三べんしたど。ほしてこんど、ねずみども、たまげて逃げて行つたらば、そこ真暗になつて、何も見えなくなつたど。そんでそのおじいさんが出て来らんねべしはあ、モグラモチになつてしまつたど。ほだからお前だ、けつして欲ふかいことなどさんねもんだぞ。どーびんと。

(伊藤せう)

15 蛇

聒

じんつあと三人の娘いて、田、旱魃で水かけらんねくて、その蛇が人に化けて、
「この田さ水かけて呉つど、どの娘でもええ一人呉れつから」

て、じんつあ一人口たったど。そしたら水かけて呉つじやど。そして今度、三人目の娘が、

「おれ嫁に行くとき、針千本呉つじえくろ」
て言うたど。親父つあまさな。

針千本あずけらつで、その娘が、蛇にのまっじやわけだど。そうすつど針でジョクジョクその中つつついて殺して、自分が出てきて帰つて来たど。

(伊藤みよの)

16 猿

聲

むかしむかし、大昔のことだげんども、三人娘もったおじんつあがいだったど。
ところが、今年のように日でり続きで、うしろ千刈、前千刈田をもつてで、そ
こに水かけに毎日、じつちやが行っていだんだど。ところが何としても水がなく
て困っていたときに、お猿さんが出てきて、

「じんちや、じんちや、何しった」

「いやあ、この通り水がなくて、まず、水かけらんねで困っていたんだ。」

「いやあ、じつちや、おれあして呉^けんべ。山さ行っておれあ持^もつてきて呉^くれつか
ら心配すんな。その代り、じつちや、約束しんべ」

「何だ、猿さん」

「いや、あのなあ、おれ嫁欲しいんだ。嫁欲しいげんどもらわんねくっていたから、
じんちや三人いんだから、一人、おれに呉^くんねが」

すつど、じじはこんなに苦勞しても水かけらんね。掛けなければ稲はわかんね。

困っていたときなもんだから、

「いや、ええどこ、んね。一人、ほんじややつから、何とか水だけはかけて呉んにやえか」

と頼んだんだ。猿は喜んで奥に行つて沢水をひいて、田んぼに入るようにして呉つて、そして今度はいよいよ猿との約束で娘を呉れんなねぐなつてしまった。じつちやが困つた。これは一応娘どもに相談しなくちやなんねえと思つて、一番大きい娘に、

「実は、猿と約束してしまつたんだ。お前、猿の嫁になつて呉んねえか」

「猿の嫁？ 嫌^やんだな、猿の嫁になつこんだら、おれあ家にいね」

「何とか聞いてもらわんねが」

「嫌んだ、あかめしよっぱいびい」

て言うて、娘は出て行つてしまつた。

次の娘に、また、じつちやが頼んだ。そのことを頼んだが、次の娘もやつぱり、猿の嫁になつた、なるもんか、おらも姉ちやのように、家になつたから、じつ

ちや、ええあんばいにすんだ。あかめしよっぱいびい」

と言うて、二人の娘は出て行ってしまった。

ところが、じっちは困った。こんどいま一人しかいない娘を、また出て行かれたんでは、

「おれはこれからどうして暮して行くんだろう、困ったもんだ」

と、頭をかかえた。一番末っ子が、

「じっちや、おれあ、嫁になんべ、猿の嫁におれ、なっから、じっちやそがえに苦しんでいっことない」

と言ってくれた。じっちは非常に喜んだ。

「ああ、そうか、お前がなってくれんのが、それだと大助りだ。猿も怒らせっこもないし、約束を守った。こんなうれしいことない」

と、して、翌日猿が娘をもらいに来た。と、じっちは、

「約束どおり、この娘を上げっから」
て行く。

「ただし、御祝儀は今晚してしまふ。それに餅でも搗いて、一つ祝つてやんべ、何もできないが、一つ食つてほして娘をつれて行つて呉ろ」

て、じつちやが大きい臼で餅を搗いて、ほして、

「娘、これもつて行げ、まづ行つたらたくさん食べて、仲よくして暮してくろよ」
て、じつちやが言つてやった。ところが猿は承知した。それは娘は持てないために、猿が、

「おれ、この餅持つて行くから、おれ背負つて行くべ」

て言うたが、重箱に入れようとすれば、

「重箱くさくて食んなくなる」

鉢に入れようとすつど、

「餅がくさくて食んねくなる」

「どうしたらええんだらう」

て言うたら、娘が、

「臼がらみ背負つてもらいたい」

と言って、縄で臼を背中に当てがって、猿がそれを背負って、二人で出だした。そして行く途中に柿の木が一本あって、そのところに来たときに、

「あの柿一つ食べたいなあ」

と言うたところが、

「よし、おれがとってやる」

て、臼をおろそうとするが、娘が、

「土に降ろせば土くさくて食えなくなる、駄目だ」

「ではどうすればええ？」

「それを背負ってとってもらいたい」

「ああ、そうか」

て、猿は臼を背負ったまま、木の上に登った。「ここらか」て、熟したやつを取ろうとしたら、

「いや、それでない。もっと上に、もっとええ柿が実っているから、その上んな取ってもらいたい」

「これか」

「いや、もっと上んな」

「これが」

「いや、そっちの方んな、ええ」

といつて、なかなかとらせない。猿も喜びのあまり、かかの言うこと聞いてやろうと思つて上へ上へのぼつて行つた。上に行つて細い枝に足がかかった時に、ビリビリと折れて、猿もろとも谷間に落ちて、それつきり猿は死んでしまつたど。

娘はさつそく家へ歸つてきて、じつちやにそのこと話して、じつちやと二人で仲ええぐ暮したもんだど。

どろびんさんすけ、さるまなぐ、さるの尻あまつかつか。

(平田幸一)

17 和尚と小僧 ― プウプウ・パタパタ ―

珍念・安念という二人の小僧が、ある寺の和尚に仕えていた。よくかせぎ者で、庭掃除、拭き掃除、掃き掃除、何でも和尚に言われるままに働いているんだけど、ある日、和尚は夜、二人の小僧の休んだところを見て、焼餅を始めた。そして灰の上なもんだから、灰を吹こうとして、プウプウ、また炉椽にパタパタと餅を叩いて、うまそうに食った。

これを見た二人の小僧は、

「和尚さまばり餅食つてだ、なぜおらだに一口食わせねなだ。うまくない」というんで、二人の小僧は約束して、翌朝、和尚さんさ、

「珍念・安念とは言うげんども、小僧々々と呼んでる。わたしらをこれからプウ、パタパタと呼んでもらいたい」

て、和尚にたのんだ。和尚は約束した。またその晩、餅焼きしてプウプウ、パタパタとした。

「和尚さま、何御用ですか」

「ああ、何も言わなかった」

「んだげんどもプウプウ、パタパタていうから、私らと呼ぶんだと思つて出てきて、和尚さま」

和尚も当惑した。餅をかくれて食おうとしたが、餅を子どもらに食せてしまった。ほしたら、今度翌日、和尚は檀家に経を詠みに行くときに、たまたまなめておった水飴の瓶を、小僧どもに食わせたくないので、

「こりや、プウプウ、パタパタ、この瓶に入つていんのは、毒だから食べてはなんねえぞ。これ食べつど死ぬからな」

ていって、和尚は出て行つた。ところがその瓶の中にはおいしい水飴があつた。なめてるどこ見たこともあるので、二人でそつとなめた。したら、なかなかうまい。まずしつかり空になるまでなめてしまった。ところが、さて困つたことは、和尚さまが帰つてきたときは、何て申訳したらええんだかと、それで和尚が大事にしておつた湯呑み茶碗を、二人で相談して割つてしまった。そこへ和尚が

帰ってきた。二人が和尚の前に手をついて。

「和尚さま、とんな（大変に）悪れごととしてしまった。掃除している最中にこれをこわしてしまった。申訳なくて死んでおわびしようと思って、和尚さまに、なめれば死ぬと言われたげんども、死んで二人でおわびしようと思ってなめて、いくらなめても死にようがなくて、今こうして苦しんでいるとこだ」

て話した。この賢い小僧のために、和尚も叱ることさえ出きなくて、許してやった。そういうことだ。どろびん。

（平田幸一）

18 和尚と三人の子ども

ある日、学校から子どもら三人が帰る途中、一本の大きな木の上に、何かの巢がかけられっただこ見つけた。んで子どもは、

「あの巢、一体なにの巢だべ」

て聞いたら、太郎は、

「あいつはカラスの巣だべ」

といった。ところが次郎は、

「いや、カラスではないぞ、あいつあはニワトリの巣だべ」

「ニワトリはあがえなどこさ巢作りすねえべちゃ」

ほうすつど、こんどは三郎が、

「あいつはツルの巣だ」

ということ、みんながおのおのの自分の言つたことで問答した。「おれはツルの巣だ」「おれはニワトリだ」「ほんねえ、あれはカラスだ」て、まず喧嘩が始つてしまった。すると向うから一人、和尚さまが歩いてきた。んで、子どもら三人が、

「和尚さま来た。あの和尚さまに聞いてみよう」というわけで、三人が止めて、したら、

「和尚さま、あの巣は一体何の巣だべ」

和尚さまは何も言わなかった。

「おれは、カラスの巣だていうた。次郎はニワトリの巣だていうし、三郎はツルの巣だていうた。一体あれは何の巣だべ」

したら、和尚は、

「いやいや、お前たち、あれはお前のいうのは皆当っていた。喧嘩なのする必要はないのだ。実はな、鳥というのは、木に巣を作る場合、一匹では作んねもんだ。二羽でなくては巣というものは作んねもんだから、ニワトリも当りだし、二羽の鳥がメスとオスでつるんで卵を生む。そして育てるもんだ。そして子はもうすでに大きくなって飛んで行った。今見るところには、鳥はいないようだ。んだから、今、空巢の巣だ。それで三人の言い分はみな当っていんなだから、喧嘩しないように、仲よくして帰れよ」

て言つて、和尚は行つたど。

(平田幸一)

19 南の山の馬鹿息子

南の山さ娘呉つじやど。そうしたらば南の山の息子と嫁でお正月礼にきたら、百姓だったべな。

「おらどこで馬買ったから、見てくろ」

て、そのの嫁の家で言うたごんだど。そしたらば、「はい」なて見たど。尻尾上げて、

「はあ、ここに木っ節穴あんなあ」

て、尻の穴見て言うたど。

そしてこんど、大風吹いたど。大風吹いたらば、流しの方でガタコン、ガタコンて音したずもよ。ほうしたらば、

「風吹いてうるさいことな」

て、家の人いたんだど。ほうしたらば、

「おすりこぎ棒がガタコン、ガタコンていうなっす」

て、南の山の馬鹿息子言うたと。

(伊藤せう)

20 南の山の馬鹿

南の山の馬鹿、用達してこいて言わつたど。したら堀コはねたそうだ。堀コはねたとたんに忘せではあ、用達さねでもどつてきたど。そういう馬鹿でも困つからなて言わつたもんだ。

(相田)

21 屁たれ嫁

嫁もらったらば、青い顔してるもんだから、「何だ」て言うたらば、
「おれ、屁つまつたもんだから、切なくていたなだ」

て言うたら、

「ほんじゃ、たれろ」

て言うたど。

「ほんじゃ、みんな炉稼おさえてておくやい。柱おさえてておくやい（下さい）」

「何だておら家んどこの嫁、そのように屁たれんべか」

と思つていたらば、うんとたつじやなて。そしてこんど、

「お前、とても屁たれる嫁、置かねから、帰つてもらわんなねなあ」

なて、そしてその嫁、

「おれも悪れから仕方ない」

荷物いっばい背負つて帰つて来た。そんな時、途中で子ども梨もぎしつた。高

いもんだから、もがanneでいたとき、

「おれもいで呉れんべちゃえ、造作ないから」て、もいで呉^くつじやつてよ。そう

したらば、尻ぐらりむくつて、そうして屁ぶうぶうたつて、もいだので、その梨

は屁くさくて食んねがつたど。どーびんと。

（伊藤せう）

22 馬鹿殿さま

お殿さまさ、

「今日は大変ええ作さくとれだし、一つお殿さまさ菜一株もっていつて上げたい」というわけで、大きな蕪一つもって行つた。

「お殿さま、うちでとれた蕪です。これを一つ食べてみて下さい」

殿さま、とつても喜んだ。そしてさっそく料理して食べてみたら、やわくて、とつてもう良かった。

「こんな蕪食つたことない。やわくて」

また欲しくなつて、あの百姓にまた所望したど。ほしたらまた次に菜をもつて行つたら、今度は作りよう聞かつた。

「どうして、こういう菜を作るんだ」

て言うたらば、

「こうして蒔いて、こうしてダラ（人糞肥料）呉つじえ、ほしてこういう風にす

るから、やっこいなだ」

ていうたど。こんどは後に硬い菜だったそうだ。あんまり硬いので、前に食つたのと全然ちがう硬つちいもんだから、

「近う、まいれ」て、その菜さ、

「ダラかけて来い」

て言うたど。

(平田幸一)

23 あけびの話

むかし、夫婦あつたけど。そしてどっちで死んでも後家とんねことだど。

そしてるうちに、女の方が先に死んだんだど。そうすつど、男は町に出て、一人だと泊めつけんども、二人だと泊めねていうのだど。宿屋で。そして暗くなつど、泊めてもらいたいと言つて行つたど。女のあれたがを持つて……。そして、「おれ

一人だ」て言うども、「おれと二人だ」て、女のあれが言うもんだど。持つて抱たがいて歩ったのが……。

そうすつど、しようなくて、

「むかしはむかし、今は今、離れてくれや、ととべべの皮」

ていうて、谷底さ投げてやったど。そうすつど、アケビが生えて、今実なつてい
るのが、そんな時のべべの皮だど。むかしとーびつたり。
(高橋うん)

24 朝 茶

あるどこに、おばんちやと孫と二人暮しの家あつたのよ。ほんで孫が山仕事しつ
たど。毎日々々、山に木伐りしたり、炭を焼いたりして行つたど。ばばが年も取つ
てるもんだから、「誰それ、朝茶のんだか」。飲まねなて言うど。

「ほんじゃ、飲んで行げよ」

と言つて、必ず朝げお茶をのませてやつていった。

ところがある日、飲まないで出て行つた。すつど年寄りには心配して、

「今日、お茶ものまねで行つてしまった。おれも忘せだつた」

て言うてたところが、孫がもどつて来たんだな。

「ばっちゃん、ばっちゃん、お茶のまねで、今日は出て行つてしまった。思い出したから、もどつて来たぞこだ」

それで戸の口のとこまで来たぞ。そうすつど屋根から大蛇がいつか呑んでくれましよう、そのばさまを呑んでくれましよう、と、屋根の棟の下から大きな口あけてねらつていだんだそうだ。ところが、ばばは、「朝茶のんで行けよ」て言うのが、その発音が年寄りなもんだから、「朝、蛇のんで行けよ」て、こういう風に孫に言うてだ。つまり「蛇」のめていうことになつてしまつて、蛇は、おれがのんでやろうと思つていだな、おれの方がのまれっこんでは大変なごんだ、て、それからその家引けて行つたぞ。朝茶は災難よけになつから一里もどつてもめというたとえがあるんだぞ。

(平田幸一)

25 白い水薬と赤い水薬

兄の方には白い水薬、妹の方には赤い水薬、一つ一つ与えて、

「お前だ、けんかするなと思ったときに、これを飲みなさい。また飲ませなさい」と、先生が調合してくれた。また、何か兄妹から、つうとのものいどり合う、言い合う、そんな時に、

「ほら、薬のめよ」

ていうてのませる。その間、薬のむうちていうもんだつたな。だまつてのんでる。けんかしなくなる。そしてけんか直したど。

(平田幸一)

26 阿平南の話

福島から米沢さ出かせぎに來た。稼ぎ兄んにやが、これが非常に体格のええ、

稼ぐことなの三人前、四人前もかぜぐ人だった。んで、田何町歩と作ってるうちに奉公に来て、長年勤めて、こんどはいよいよ家に帰るといふときに、その旦那が、

「お前も大分長年、家さ手伝つてくつじゃし、よく稼いで呉つじゃから、お前の望みのものは一背負いだけ呉つじえやつから」

て言うたど。

体格もええから、その一背負いが大きいもんだべげんども、どの程度の力あつかも、家の旦那だつて見定めたもんでない。その約束したど。

「ああ、旦那さま、ほうか、それはありがたいもんだな」

て言うて、

「ほんじゃ、まず。あした、あさつては行かんね、ほいつ出てから帰らせてもらうべ」

て言うて、毎日藁打つてモトチ^な縋^ないしたど。いや、毎日それ^な縋^なった。二日ばりそして作つたのは網だど。そしてそのうちに旦那は家で稲こいでしまったべし、一^{ひと}

ニヨウだけ残していたそうだ。そんな時に、おいとまするようになった。

「何にしつかな」

と思つて、家の旦那もみんなも見つだんだが、その朝早く起きて、そのニヨウさすつぽり網かぶせて、ほして、

「旦那さま、ほんじゃここでおさらばだ。帰らせてもらう。これ一つおもらいして行けば、おれ、何とか食つて行かれんべから」

て、グランとかついで、スタコラ、スタコラ出だした。んだから豪傑というものは、無限なもんだから、ノッソノッソ行つた。ところが旦那は大困りした。種子までとつて置かねわけだ。翌年のな。

困つたもんだから、後追いかけたていうんだ。

「アヘイナン、アヘイナン、待つてろ、アヘイナン待つてろ」

て行つたど。ところがテンテン、テンテンと行く、そのアゴの大きいこと、まづ旦那も追つかけらんねで、とうとう福島^の庭坂まで行つた。その庭坂と言うのは、この網から二把、稲を引ん抜いたところだ。やっと網の目から手入つて、やつ

と二把抜いたとこだど。ところがその阿平南は稼ぎ者で、吾妻（山）の萱平かやたいらていうとこに畠を起して、あそこに朝仕事にラッキョー畠を作ったという。そして朝げサコ切りに行っていたとき、ふいら大きい石が出てきたもんだから、

「こんなくたまな（困った）、こんげな石」

て言うもんで、足で蹴つぽったのが、ちょうど関（米沢市関）のどこの「立石」まで飛んできて、立ったもんだから、そういう名になつたて言うたもんだ。

（平田幸一）

27 お恵比須さま

恵比須さまはおかたの持たね人た。

んで、お恵比須さまの御祝儀だと称して、十月二十日に恵比須講のときに、股大根をカシの葉に包んで藁でしばって、それをお供えとして恵比須さまのお祭り

をするわけよ。お神酒上げてな。

そいつのいわれは……。

お恵比須さまは餅好きな人で、一食^{ひと}いに五升食わないでは食った空ないのだど。そういう大食家であつた。んで、お恵比須さまは餅好きだから、一晚招ぶべて、招んでくれたとこあつた。ほして、まず、

「五升は上がんだから、家の人も食うべから、ちよつと余計にしろ」

というわけで搗いたんだげんども、家の人はお恵比須さまさばり、余計に食せんべと思つて、余計に食せたど。

「いや、これはうまい、これはうまい」

て食つて、まず、

「こんで、たくさん食つた」

ところが、余つたもんだから、

「このように好きでいやつたもの、いまちいと食れ^かっこで」

て言うわけで、すすめたというわけよ。ほうすつど好きなもので、

「んじゃ、いま少し御馳走になっか」

て、食ったところあ、とてもとても、いつもと違ってこんど苦しくなってきたというわけだ。ほして、まずはあ、おいとまも早々にして帰り道途中で、娘が川で大根洗いしたてだ。秋だから。ほして、

「大根食いたいなあ、大根食うど消化がええ」
ということ、

「大根一本呉つでけらんねが」

て頼んだど。娘の言うことにや、

「これは一本、なんぼで頼まつで、おれあ洗っていんなだから、上げらんね」

て、ことわったわけだ。ところが娘も賢いもんだから、いじっているうちに、股大根みつけたていうんだな。そうすつど、

「股だから、片一方もいだったて、一本は一本だ」

ていうわけで、もいだ一つをくれたて言うわけだ。ほうすつどお恵比須さま喜んで、むちやむちや生で食ったわけだ。

して、腹の方もこんどはすうつとしてきたわけだ。それでお恵比須さまが命びろいした。それからおかたというものを持つ気はない。んで、御祝儀と称して大根を上げてもらう。それがおかたとして命の恩人だから、かかとしてお恵比須さまは満足している。

んだから、お恵比須さまに上げたお供えは、若衆には食わせんなよて言うてる。嫁、贅前は食^かせんな、もし食わせつどきは夫婦の者が半分かじってくれるか、ぶつ欠いて呉れるか、そうして食わせろという。

お恵比須さまは独身だから、お恵比須さまのものを食うど、嫁に行かんね、贅に行かんねていうど。また餅さ招ぶときにはオロシ（大根）をすることになつてるのもそれだ。

（平田幸一）

28 のろのろ話

今日ものろのろ、明日ものろのろ、のろのろてばりいたら、しょうあんまいなあ。

(相田)

29 狐に化かされた話

小松から、昔、米沢に正月買いだ、何だていうと来^くんなねがった。

その間に松林が大分長く続くどこあんのよ、小松の近くに。そこにたまたま狐が出て、人が化かされたという話があったもんだ。

ところが、ある人が米沢に買ひものに来て、お正月の料理だから、たくさん買つて行かんねわけだ。んで、そのあたり菰にたいがい塩引なんていうものの包んだり、カラカイなどくるんで首にかけるように縄を通して来たもんだ。ところがそ

のお客さんはいろいろ買つて最後に塩引の頭二・三買ったていうわけだ。

やんさと肩さかけて家に帰る途中、その夕方でもないげんども、うすぐらくなつてきたような風なとき、うしろから追っかけてきた。そして首のもの引っぱるていうんだな。それから何だべと思つてうしろヒョイツと見つど、誰もいね、またてくてく歩いて、またうしろからグイーツと引っぱるので、縄、喉さかかつて、切ないもんだから、手、ちよいつとやってみたら、狐だった。そうすつどその親父もなかなか横柄な親父であつたから、

「野郎、おれどこは化かにさんねごで、人どこよく化かにするそうだげんども、おれどこ化かにさんねごで」

ていう。だんだん松林の中さ入って行つてしまった。してるうちによ、うすぐらくなつた。また荷物に手かけた。

「こら、この野郎、われに食せんを買つてきたんでないぞ、こいつで年取りしんなねなだ。にさなような者（お前のような者）さ食せられんめえちやえ」
て言うわけで、一人言いいながら行つたど。

それからうちに、真暗になってしまった。向うに灯りがともった。

「さてさて、家さ来た」

と思つて家の前まで行つて、

「かか、今帰った」

て言つたそうだ。

「あら、何だ、とうちゃん。遅いもんだから心配したなよ」

て、出てきたのは、カカ。

「カカ、カカ、どうせ何だから、いっぱい買つてきた。塩引がんだから何から……」

て、おろしにかかったところあ、カカ魂消て菰の包みを見ただけあ、

「何だ、とおちゃん、魚買つてきたつて、たわえないこと。魚でなどないごで。

人の生首だごで」

て言つたど。

「馬鹿語んな、生首なて、たわえないこと語んな、塩引の頭がんだあつたから三つ四つ

買つて来たなだ。よく見ろ」

「いや、見だたて、塩引の頭でないコ。生首だてコ」

て、ほして、カカが一つ持った^{たが}のが、生首だつたど。そうすつど親父はぶつたまげてしまったど。はつと思つていたところあ、目が覚めた。ポカツと明るくなつた。そんどきには菰の中には何もなかつたど。狐は一人だと化かにされっけんど、二人だと化かにさんねもんだど。

30 狐に化かさつた話

おれ、稼^とぎ人一人たのんで、親父と三人で田植えしつたんだど。午後からな。ところが夕方にわかな曇り方してきて、頭重たいような雲が出てきて、雷がガアガア、ガアガアなつたもんだ。

「そうら、こんなごんではサツキしてらんね。早くあえべよはあ」
て、親父だは帰る仕度した。ところが馬がいだったから、馬の餌^{もの}、これから行つ

て濡った体で馬の餌切つて食せるよりも、草ひとなぎでも刈つて行つて、ひよいとあずければそれで終りだ。

「せっかく馬持つて来たから、ちよつと草刈りして行んから」

て言うたらば、親父も、

「そがえな時草刈りなどしてんな、危ないから。鎌なのあれば雷落ちんぞ」

て言うて、二人帰つてしまったのよ。親父だ帰つた後、おれあドーランを出して煙草一服のんでるうち何でもないのよ。そして鎌とぎして刈りに入ろうとしたとき、ピカピカて雷よ。鎌ひよいと田の中さ見えなくなるほど刺したごで。ほしてまた様子見つたら、雷遠くさ行つたようだから、刈り始めた。いや、真暗になたわけよ。ほしたらちようど根にな、杉林がかなりあつたのよ。

昼間もくらしいような、そこでヒタンヒタンという音すんのよ。山刀で木を切る音、鋸で切る音、木がさけて折れる音が、おれの耳に入ってくるのよ。ヒタンヒタン、バリバリ、ボタンていう音よ。

「さておかしいぞ、今に、この雨降りに、なんぼなんだて、人の家の木盗みに来つ

たんだべか」

て思つて、耳すまして聞いたげんど、聞いていっどき音すねんだな。また草刈りにかかろうとすると、またガダンガダン、バチバチという音が、ちょうどそこに。「はあ、あの森だ」と思つた。

「何としてもおかしい。こりや人でない。いまごろ人は居らんね、こんな真暗な中で」

て考えたかな、そうすつど体よれて、チンケの毛立つた。

「さあ、これは魔物だな」

と思つて、

「いや、こんなどこにいたんでは化かにされる」

て考えたか、わらわら荷縄敷いて、草を積んで、ミノ着て、鎌を素手にたがつて出だした。出だしたら後、ピチャピチャ、ピチャピチャて人が来るんだ。おかしいなと思つて、おれより遅いのいたべかなと思つて見てもいねんだ。

また歩き出すと、ピチャピチャと来るんだ。なんべんうしろ振り返してもいね

のよ。いたような、気味わるいぐなった。わずかに広い、みんな歩く道路さ出てしまった。出たばほっとした。そして家に帰って草を馬に与えて家さ寄った。

(平田幸一)

31 狐の鳴き声

狐の「オギヤア鳴き」ていうのは、一匹では鳴けねもんだ。狐ていうのは、二匹向かわないと、オギヤア鳴きしない。こっちで「オホホ」ていうど、そっちで「ギヤア」という。オー・ギヤア。オー・ギヤアていう。これが「オフギヤア、オフギヤア」ていうのと同じに聞えるんだそうだ。それ、窓のぶっさけから何回も見たことあるという話だ。

ほれから、人を化かにする狐ていうのは、よい狐、祀らってる狐だって、何か悪いことすれば、アダされるていうけれども、祀らってる狐というのは本当の狐

であつて、狐にも二種類あるということきいてる。

狐とケツネというのだそうだ。

武士の時代に、侍が立っていつとき、平民は立たないように、ケツネというのは、祀らんねために、アダしたもんだ。ほんで狐には正一位稲荷大明神という大した位をもった狐がいる。正一位稲荷大明神ざあ、この日本に支那から稲穂をくわえてもつてきた。あの海を渡つてきて日本を開いた狐だ。今ここで百姓していんのも、そのおかげだし、豊葦原瑞穂の国という銘もその時からだ。(平田幸一)

32 狐むかし

田沢の中山越えて、一里ばりある峠あるのよ。その真中ごろに沢あんのよ。そこによく狐がいた。苞つととらつで空からにさつで、落ちてんの、のんべに(よく)あつたな。十七・八才あたりたな、おれ……。

おら家どこの舎弟が便所さ起きたど。そしたれば、冬だつたげんども、外ちよえつと見たらば、提灯つけた者、そちや行つたりこちや行つたりして、同じどこにいて決して来ねなだけど。

「何だか、あの人、狐に化かにさつじやであんめえか、むごさいごんだこてなあ」
て、行つてみたど。やっぱり狐に化かにさつで、目付きころつと別になつてよ、
そうしているもんだから、自分が帰つてくつかと思つたらば、前さ山出て、決して向うさ行かんねもんだずもよ。困つたごんだなあと思つて、傍の家さ寄つて、
「何だか、おれ、氣持わるぐしたんだか、本当でないから、ちいと休ませておくやい」

なて言うたそうだ。「何しやつたごんだ」なて。「ほんじや寄つて火焚っからあ
たつて行げ」なて言わつて、火焚いてもらつてあたつて、そのうちに夜明けたも
んだから、歸つて来たつて。

（伊藤せう）

33 お 彼 岸

お彼岸にいそがしいもんだから、稲一把、佛さまさ上げて、そうして稲刈りに行つたごんだど。そうしたらば、お佛さま怒つてよ、夢枕に立つて、

「なんぼいそがしいったて、御飯食ねで働かんねべに、稲一把上げらっじやたてそいつ食れつか」

て、怒つて、「子ども、火さくべてくれっから」てだど。そうしてあるとき、おぼこが本当に、ユルリで火傷して死んでいだんだけど。んだから、やつぱりお佛さまも決してお粗末にさんねもんだぞ。

(伊藤せう)

34 彼岸のわか

今日行つて、お彼岸だから、お佛あそばせして来^くんで、米持^たつて、ばばが出て

行くとき、じじが、「また、わかさが」

「お彼岸だもの、わかさ行ってお佛出して喜ばせてくれんべ」

「ええがんべ、よく訳わかつているごんだな、おら家のばばも」

ほしてこんど、ばさまが出て行つた後に、お佛さまから位牌、掛図全部おろして、縄の切れっこでまるって、椽の下深く入って、じさまは待つていたど。

「ばば、なじよな顔面つらしてくるもんだか、今日、何言わつて来るんだか」

というわけでいたところが、お昼ごろ、ばば帰つてきたど。いや、見たところあ青い顔面している。いつものばばでない。

「ばば、ばば、何だ、顔色われなあ」

「いや、じつちや、今日はなあ、困つたごんだ。何かあつた。どの佛もどの佛も縄目に合つて出らんねごんだということ言うんだ。いつもだと、座敷を借りて出たといつて、隣のじじも出てみたり、考えね先祖出てみたりしていたんだげんど、今日に限つて誰一人出らんね、縄目に合つて出らんねという言葉だけだった。がっかりしてきた」

といつて、じさまに話したところあ、じさまは、

「いや、そうか、いや、本当はこういう風にしつたなよ。われあ、訳分かっていっから、ほっげなことと思つて、おれあ試してみたんだ」

て、ほら、つて椽の下から出してきた。お掛図やら位牌やら、全部縄でしばつたな。そうすつど、じじもたまげてしまつて、

「これはとんなこと、不調法なこととしてしまったもんだ」

やつぱりお佛さまはあるというて、ばばさ手ついてあやまつたど。

「これから、絶対こういふことしない」
てだど。どろびん。

(平田幸一)

35 鬼子母神

子どもを百人もつたおかあさんがいだった。ところが自分の子どもはかわいく

て、かわいくて、どの子どももめんごくしていたんだけれども、鬼のような気持をちよいちよい起して、人をとって食うようになった。自分の子どもを食わないで他人の子どもをとって食うんだど。

ところがある時、その子ども百人中の一人を神さまが隠してやった。ほうすつど、一人がいないので、非常に魂消てしまつて、毎日まいにち、気狂いのようになつて探していた。と、そこに出てきたのは神さまで、

「お前は、なぜ子をとって食べんのだ。そんなに食べたかつたら、百人の子どもいるんでないか、自分の子ども食べたかどうか」

こういわれた。ところが親と子の愛情というものはちがう。

「自分の子のはかわいい、他人の子はかわいくない」

というようなことから、こうして他人の子をとって食つていたんだげんども、その時にいわれたことは、

「百人いたもの、一人ばりいなくなつたて、そんなに気狂いじみてさわぐことあんまいな、一人しかいない、二人しかいない者にとって、食べられたら、どれほ

ど親の悩みが多いだろう。そこを少し考えてみなさい。これから先、この子どもをとって食うなら、ただちに処罰する。みなの子どもを殺してやる」

ていわれた。して、そのかがあやまって、

「いやいや、そういうわけだ、ほんではおれが悪いがったから、今後はとって食うということではなく、みんなの子どもをわたしが病氣から守って立派に育つようにするから、どうか勘弁してもらいたい」

といって、あやまって、それ以来子どもの守神として祀られ、子どもを守っている。これが鬼子母神というもんだ。

(平田幸一)

36 オタナサマ

オタナサマのお祭りに、カレー五枚上げる家あった。大変な大百姓であつたそうだな。それでその年、カレーが少なく、大百姓は稼とぎ人に、魚屋にみな当

らせたごんだど。だげんども、どうしてもカレー四枚しか手に入れらんねがったど。旦那は、

「もう一枚、カレーないくちや上げらんね。もう一枚買えないわけではない」
て、怒って、

「そんなカレー、投げてこい」

ていうので、買いにやらさつた若衆は反対に怒って、一人が、

「おれ、投げてくる」

て行って、自分の家さもつて行ってはあ、旦那には「投げてきた」ていうたど。

「旦那のシンシヨ―はシマイガレー、おれのシンシヨ―はヨカレ」
ていうたら、本当にそれから旦那の家はシンシヨ―が傾いてしまったど。

(平田幸一)

37 お文殊さまと宿借り普賢

お普賢さまは、もと金持であつたど。

「なじよしたら貧乏するもんだべ、貧乏のしようない」

ほしたらば、

「箸焼くと、粗末にすつど貧乏するもんださ」

と教えて呉つじや。

「ほんじや、してみつか」

というわけで、箸をかまわず焼いた。そしたらやっぱり貧乏してしまった。んだから箸は焼くなよ、古くなったら流せよという。それで二度家を建てらんねために、お普賢さまは文殊さまより頭よかつたけれど、

「いや、おれ、家に入るべく探していつけんども、どこにもないし、あだい大きな家さ入っていんべ、お前は一寸六分だかの身成りしてで、あのような大きい家さ入っていいこともない筈だ。おれに、どこか貸してくろ」

ていうたら、

「お前は賢いから、裏貸すから入れ、その代り、おれ、あまり頭ええなでないから、おれどこさ、さまさま聞きにくる。たのみに来る。たのみにきたとき、お前、うしろで教えろよ、おれさ」

そしたば、「ええどこでない」という約束で、入ったんだど。ほんで文殊さまはきかれつど、うしろにいる普賢さまが教えて呉^けるんだど。

(平田幸一)

38 塩井の弘法さま

塩井ていうところは、中州になっていたところだった。大旱魃の年に、ここにござつて弘法大師は、暑い日であつたそうだ。「水一杯呉^くつでくんねが」と、所望されたわけだ。ところが見れば身なりなていうのは乞食^{ほいと}だ。おんぼろ、さすぼろ着て、笠一蓋かぶつて、杖ついたぐらいで、ちようどここのお寺さんの前にきて、

たのんだところが、「いやいや、何里も行って飲み水汲んで来んなねだから、お前にあげられない。おれさえも困っていつどこだぜ」というたてだな。そして清右エ門どこさ来て、「二晩泊めてけろ」というたら、

「いや、カヤもないし、わかんね。ここらなの広い田んぼなもので、蚊、ぶんぶんきて、とても寝らんねごんだ」

ほしたら、「いやいや、何にもいらね、軒場さでも結構だ」というたそうだけれども、なじよな人だか分んねもんだから、「いやいや、こんなどこだげんど、寄って泊ってください」

て、泊めたど。

後日の話だが、その部屋にだけ蚊が一匹もいないがったど。そうして、

「こうして泊めてまでもらったから、こんなに水に苦しんでいつこんだらば、何とかしてやろう」

といって杖でちよえつ、ちよえつとついたら、そっから水が湧き出たど。

(色摩清見)

39 中田の石芋

弘法大師が通ったときに、娘さんが芋洗いしておったど。んで、

「その芋一つ、ごちそうしてくれないか」

と、娘にたのんだら、

「芋などあげらんね」て、いたずら語って、「こいつあ石芋だも、食んねなだ」

と、こういうたていうんだな。その娘がよ。「ああ、石芋では食んねごで」ていうて、大師さまはそのまま行ってしまったど。

それから、こんど家さ行つてその芋をゆでて食べようとしたが、石でわかんね。なんぼう煮ても煮えないていうんだ。ガチガチてな。それから石芋になったど。

中田では、それを神おろしして、みんなであやまって、今では作れるようになったど。

(平田幸一)

40 美女塚と美男塚

小野小町は非常に信仰家であつたらしい。小野小町が美女であつたが、癩病らしいがつたんだな。それでカサコが出きたもんだから、家に帰ろうということ、旅を続けてこつちにきた。そしたら、あそこに、ええ、カサの治るお湯があると聞いて、お湯にきて、浸っていた。

そのとき、たまたま美女塚にお詣りに来たんだ。そしてあそこに倒れたという。ところが、小野小町の恋人が小柳の方通つて川辺を通つたが、今の美男塚でこれも倒れてしまった。そんで向かい合つて祀つたという。

美女塚は西向きなので、吹雪でひどいがんばと思つて、村人が南向きに直してくれたら、その夜のうちに西向きになつたという。またその間に三之丞が家を建てたが、あれも不幸にあつたな。

それは小野小町とその恋人が両方で眺めているのだから、途中さ家を建てたりさんね。また川辺の伊藤さんの家ではやっぱり途中に新しい家を建てて入つたと

き、夜になったていうと、その家がゆすられるということあった。

(色摩清見)

41 鬼 面 川

小野小町がお湯に入りきた。大体よくなったとき、川で手すいでしたとき、川を見たところが、顔が非常にみにくく見えたので、鬼面川ということになった。昔はこの川、毎年どこかで人身御供があった。子どもの水死とか、大人が死んで上がったということあったが、今はなくなった。

(色摩清見)

42 お葉山

お葉山には、おみよという人が塩井に縁があつて塩井さ来たが、その人が機織りしつた。あそこに、たまたま薪拾いに行つたそうだ。そしたら白蛇がとぐろを巻いていたど。そいつを見たら、さわさわ、さわさわてなつたていうのだな。太い白蛇な。おみよという人は蛇たんと嫌いではなかつたどな。んだげんど、さわさわていうので帰つてきた。そしたら、こんど、本家さお湯さ入りに行つた。その晩に限つて礼釈もしないで、わらわらお湯さ入つた。そうすつど親父来つたもんだから、

「今、これから山さ行かなねから、やきめし握らんなね」
て、きかない。

「これから山さあ、なんだ」「いや、迎えにきつた。とてもええ男、透きとおるよくなええ男迎えに来つたから」ていう。その男は高橋さんのクルミの木の下さ立つてたていうんだな。親父はそんなことさんねというんで、押えつた。そしてその

晩終った。

こんどはノリキさ行つてきいたら、その白蛇が出てきて、

「人に見られる姿でないどこを見らっじやから、この人をもらつて行かんね。人身御供にもらつて行かんね」

ていうて、やつとあやまつて、どうにか落付けたげんども、機織りに行つてみつど、機のどこさ、ゾ克蘭と蛇がぶら下がっている。そいつがうんと氣持ええんだど。

(色摩清見)

43 狐 つ き

わたしの妹が六郷さ嫁に行つて、そしたら産後の日たちがわるくて、わずらつて、時にちょうど三月十七日の毘沙門さまのお祭りの日であつた。

そのとき、おつかさと娘と、新田（米沢市新田）のおつかさと娘と、それから

南原（米沢市南原）のおつかさと娘とお招びした。そして招んだところが、みんなきておくやったわけだ。ところが六郷の家でだけこないで、その弟が来たのよ。

「今朝、姉さわるくなつて、今日来らんねど」

ていうのよ。その前から産後の日立ちわるくていたななで、ほんで、

「今日、お客さまござつから、ばつちや行つてきてけるな」

て、うちの母親をすぐ六郷さやったのよ。そしたら間もなく孫つれて帰つてきたんだな。

「なんだ、今帰つて来たなか」

「んだ、今度よつぽどええ、起きているようになった」

「それではええがった。ほんじゃ、おれ、明日行つてみる」

なて、その翌日行つてみたのよ、そしたら起きて縁側で大根の皮むきなどしつたけ。

「なんだ、ほんでええぐなつたな」

「んだ、うんとええぐなつた、こんどあ」なんて、

「みんな誰もいない、どこさ行つたんだ」

「みんな、苗代さ出つただから、父ちゃん助けて行つて呉^すんねえが」なて言うから、

「あまりええ、あまりええ、何かボロ出してけろ」

なて、仕事着出させて、手伝つたのよ。午前中一枚（田）残つたので、

「残つたげんど、やめろはあ」ていいうげんども、

「一枚ばり残して、また昼間から出るなていうど、大変だから、みな終してしまえはあ」なて、一時頃までかかったもな。そして家に帰つてみたら、こんどとなりのおつかさきて、御飯出してけつたもな。

「おゆき（娘の名）、どこさ行つた、こら」ていうたら、

「何だか頭いたいなて寝たから、おれ、して呉^けつだんだ」なていうなだけあ。「ああ、ほうか」て行つてみたけあ、うなつていて分んねなだもな。そうすつど、まず親族衆はみな集つて、

「こんど、おれ藤泉（米沢市藤泉）のお稻荷さまさ行く」

「おれ、八立の地蔵さまさ行く」て、みな走つて呉^すつじやものよ。そうすつど、

そいつあ藤泉のお稲荷さまさ行ってきた。そしてますますわるくなって行くんだな。仕様ないからな。

そうしているうちに田植えになって、みんな田植に外さ出て、おゆき一人、家の中にねっただわけだ。そしてそのお稲荷さまのお札、絶対枕元から放さねんだな。かまわず枕さ敷いておくんだな。

ところが、そのお札しまってダンスから着物出して、着換えて出て、小山田街道来たていうわけよ。今まで養なつてもらつてた人がよ、六月の三日だったな。おれは畠しつたつたごで。川原の畠さ出っだんだ。そしたら家の妻^{かか}が迎えにきたんだ。

「まず、おゆきがねっだな起して、小山田街道きたから」

もつとも、隣の人が見つけてくれたんだな。

「何だ、おゆきさ、どさか行くぜそ」て言わっだもんだから、来たらと思つていたげんど、姿見えないていうんだな。見えねもんだから、「何だべ、どこさ行つたべ」ていうわけで、舎弟が中街道きたんだ。そして家さ来たげんど、おゆきは来

ていね。んだもんだから、

「姉さ、こういう風にして出てきた」ていうもんだから、家の妻やおしんがきて、

「おゆきは、何とまず、寝っただの起きて家さきるといつてきたの、見つけらんねがら、どこさ行つたんだか、行つてみて呉ろ、まず」

こういうわけで、ほんじゃということ、川原まっすぐ行つたごで、ずうつと行つて渡りあげる頃、女子ども三人いだんだな、それから、

「お前だ、ここ、二十二・三になる女の人通んねがつたべな」

そしたら、その女子どもがよ、「おゆきでないか」ていうんだな。「ほだ、おゆきよ」ていうたらば、

「あら、今、庄蔵さんが自転車にのせて、小山田街道を、家さ行くていうて、塩野さ行つたな」

「ほじゃ、ええがつた」て来たら、家の婆が川原からきて、「会つた」ていうんだな。そして、

「おゆき、おゆき、何だまず、きんなまで養なつてもらつて食せてもらつていた

状態で、よく来たごと」ていうた。「こわく（疲れ）ないがったか」ていうたば、「いや、こわくなて、さっぱりない。いや、うしろ前、狐ぞろぞろ送^けつて呉^けで、とても面白がった」ていう。そしてきた。それから家さ着いた。そんでお札持つて決して放さね。これは奇態だ。

ところが、川原に子持ちの狐いた。それだったんだな。そして、

「とにかく、狐つきだ。踊りおどつてみたりよ、歌うたつてみたり、何でも芸当する器用なもんだ。今度、夜中、こっそり引張り出すんだな。山さなの、川さなのな。」

うちの婆がノリキさ行つて開いたのよ。

「おれは川原さいる狐で、子ども持つてる、無職なもんだから、仕様なくて、お竹稲荷さ使つてけるて、今行つてんのだ」

「何で人を苦しめる」ていうたば、

「いや、主人がら命令で、あの人苦しめろ、そうすつどお詣りにくる。お詣りに行けば何かもつて来っからな、そういうようにして来るようにしむける。そうい

わっでいんだ」

そうしたら、こっちで、

「人を苦しめるようなのは神でない、こっちの正一位稲荷大明神、伏見稲荷を祀っているのだから、こっちさ来い」ていうたところが、

「ほうか、そうなのしてもらえろごんだら、大変しあわせだ」

そしてこっちに来る。そうすつど、狐つきはすうつと抜けんのよ。その狐は三日ぐらい、おゆきに何もしない。それからまたわるくなるんだな。そしてお詣りに行くと、またええぐなる。

「いや、とつても居づらくて、とつても居らんねから、もどつてきた」

そして、あたしが町さ行つたとき、

「こいつはここの稲荷やノリキではわかんねもんだ、正一位稲荷、竹駒とか伏見とかさ行つて、悪魔祓いをしてもらわないとわかんね」

そうしているうちに、田植の時になあ、家さサナブリだった。六郷で早く終して、おら家さ手伝いに来たのよ、そして孫つれて来たもんだ。「おれ、子守する」

て背負って、その頃よつぽどええかった。

そうすつど、もう一人、ちっちゃなおぼこつれて、川原さ、おゆきが行った。ほしてこんど、西の田んぼ終してかえつてきて、

「おゆきは帰ったか」ていうたら、

「まだ帰って来ね、川原さ行つて見て呉ろ」ていうもんで、何だべて自転車で川原さ行つた。そして下・上^{しも かみ}見つけんども、いねんだな。

「こりや、おぼこ背負つて、六郷さ行つたんだべか」て、ずうつと川端行つたら、泉橋のどこで、腰おろして、背中のおぼこはギャンギャン泣いていんのよ。

脇にいたのも泣き声出してゐる。

そして、おゆきは平気で歌うたつていんのよ。

「何だ、まず。おゆき、こだなどこにいらんねべに、歩^あえべ」

また、六郷では、田植終して米沢さ出る人もいて、

「なんだ、おゆき。こがえなどで何してんのや」

ていう人もいるもんで、

「いますこし、あっちさ行くべ」

ていうげんども、

「ええ、行がね」

「とにかく、歩^あえべ」

「こわくて（疲れて）行かんね」

ていうから、

「ほんじゃ、近所からリヤカー借りてくるから、リヤカーさのって行くべ」

「リヤカーさなの、のんね」

「ほんじゃ、何で行くのや」

「おらあ、バスで行く」

その頃、終戦の頃だから、バスはなかったのよ。

「ここは、バス通んねぞ」

ていうど、

「通んねざあんまいず、今通って行って、帰りにのせっからて言うて行った」

こういうもんだな。決して聞かねんだ。そして、まず、やつとだましてリヤカーにのせること承諾させて、リヤカー借りに行ったごで。そしたら、その店のリヤカーはパンクしているんだな。仕方なくて、家き取りに走ってもらって、のせて行くべと思うと、狐ざあ、ほとほと困らせるんだな。「のんね、のんね」て、言うこと聞かね。「バスで行くって」きかね。

「バスなの、ないんだから」

ていうてもわかんね。

「バスがないなんて、あんまいちや、今行ったばかりなもの」

て、理屈ばりは、とつてもええんだ。

そして、まず仕方ないと思って、夫がきたので、たのんで、おれはひとまず帰ったけなあ。

サツキが終って、おれが宮城県の竹駒さまさ行ってきたつけが、行ったらガクツとなつて、それから、おゆきの狐つきが完全に抜けだつて。本当に人を困らせるもんだなあ狐ざあ。

(色摩清見)

第 2 部

米沢市田沢の昔話と伝説

1 蛙と猿の寄合餅

むかしあつたけど。

ちやうど脇の家で、餅搗いてペッタンコ、ペッタンコと餅搗いてたどこ、猿と蛙あ、

「みんな食つてゐるうち、あの餅背負つてつて、山さもつて行つて分けて食うべ」
て、二匹で来て、

「なじよして持つて行く」

て。そうしたらば、その蛙は、

「おれ、池さとび込んで、オボコの泣き声を立てたとき、みんなワツと餅搗いっ
だどこ、たまげて出て来たとき、お猿さん、背負つて山さ、そして盗め」

と、こういう相談になつて、そしてそのオフギア、オフギアで泣いた。そうすつ
ど、

「なんだオボコあ、池さ入った、んねが」

なて、みんな騒いで池さ廻っているうちに、その裏の戸の口さ、臼そのまま置いて、みな池の方さ行くべから、ほんどき猿、臼がらみ背負つて、猿あ荒がつたもんだなあ、なて、丁度裏山さ行つて、蛙も弱いもんだから、
「あんまり山さ行かねで、このへんで分けねがあ、お猿さん」
て言つたれば、

「駄目だ、この山の上さあがつて、そして行ぐど、何も心配ないから、山さあがつて分ける」

こういうわけで、背負つて登つた。あとから蛙はピッタンピッタンと上がつてようやく山さ着いた頃、

「やれ、こんど分けてもらわれる」

と思つて安心したところあ、こんどは、

「こつから、まぐつてやつて、下さ行つて一番先に臼に追つかつた人は、全部もらうこと、こう決めないか」

というた。

「そんなこと、おれは弱くて駄目だから、ここで分けてくる」

て、再三たのんだげんども、猿が、

「山さのぼったのは、おれ、こういう計画でのぼったのだから、駄目だ」

て、話してゐるうちにまくったていう。ドンドン、ゴロゴロまくった。そうすつとお猿さんは後になり先になりして、臼のすば走って来っけんども、蛙はとてもしう来ないもんだから、

「さてさて、困ったことしたもんだ。おれは餅食んねなあ」

と、来たところあ、立木の脇さドシートと餅は落ちてよ、そうしていたところあ、その臼から皆はがっだように大きく落ちてゐる。

「いや、これはよかった」

と思つて竹の葉さなど包んだのを風呂敷さ包んで降りて来たど。

そしていたところあ、お猿さんは後から上がつて来た。そして、

「下まで行つたところ、臼ばりで、餅なかつたから、餅見つけて来たか」
て言うたら、

「おれ、こういうわけで後から来たれば落ちっただから、風呂敷さ包んで背負ってきた」

お猿さんは、「そいつ、よこせ」と喧嘩になったところあ、

「お前はそんなもの食たいなら、みなやる」

なて、そして蛙は、そいつから出して、猿の顔面さ、ビダーツとぶつつけたど。そうしていたところあ、あついあついで、火傷したど。それで猿の顔面さあ、赤かったもんだど。どろびんどろすけ、さるまなぐ、さるのまなぐに毛が生えて、けっけつ毛抜きで抜いたれば、まんまん真赤な血ができた。

（関場亥之助）

2 不 洞 沢（伝説）

八谷のちょうどかげに、不洞沢という沢がある。そこでお不動さまが生まったという。その奥に胎内くぐりというところがあり、その下にお釜という滝があつて、流れて来た材木も入れば、石も流れてきて、みな入るのだが水の力ですつかり掃けて、いつでもそこはお釜になつてゐる。そのお釜がお不動さまの産湯に使つたところである。またそのお湯の加減を見たということから、その脇の沢を、「カゲン」と名付けた。そして何才の時のことか、お不動さまは峯越しにずっと越えて来た。ところがお不動さまの通つたところの木が何だかおかしい。そう思つて見たところが、誰が火焚いたわけでもないのに、みな木の枝からずうっと焼けて枯れてあつた。それはお不動さまが、火炎不動だったからだという。

そうして、この大荒沢山にきたわけだ。東向きの滝があつたもんだから、そこにこもつたというのが、大荒沢山の不動さまのはじまりということだ。

3 大師山（伝説）

大荒沢山の向いの山に、米沢の方から弘法大師がずうっと登って来たとき、五色の雲がたなびいて見えたもんだから、そこまで来た。そして山にのぼって四方を眺めたもんだから、この山を大師山と名付けた。今も峯にのぼって護摩を焚いた跡というのがあって、そのところには木が生えない。

4 田沢の七不思議（伝説）

(一) 弘法大師がそこを通ったとき、川端で里いもを、ばばちやが洗っていたところから来て、「そのいも、少し分けてもらわんねが」て言うたところあ、「こいつあ石いもで、とっても食^かんねから駄目だ」て、そう言うたど。それで今でもそこから、とれるのは石いもで食^かんねがら、いもは作らね。

(二) その弘法さんが、そんとき、「ばばちや、サネ見えんぜ」て言うたど。そうすつど、「おれなど、とつくにサネなど、もげてないはあ」て言うたど。そんでその家に身成持ちしんじよのええのなの引受けて来つど、その人は皆サネがもげるて、そこをわすらうそうだ。

(三) その家では、また家の戸口の錠前をかけない。錠をかけると、かえつて泥棒に入られるという。

(四) その家では、雨が降つても、雨だれの音がしない、雨だれが落ちない。

(五) その田にいるツブ（タニシ）はみな盲目だそうだ。

(六) その田に入つても、ヒルは一匹も足になど吸い付かない。

(七) その不動産さまは、栗のカラが不動産さまになつたもので、「栗カラ不動」と言っている。

5 八谷の金掘り（伝説）

むかし、八谷で金を掘ったとき、とつてもええどこ見つけた。そんで喜こんだ連中は米沢から芸者四人を招ばって、酒盛りすることにした。その芸者は馬で来たそうだ。

そして山に入ったところが、むかし、神原の下かみすきの紙漉かみすきという部落のところをずうっと山にのぼるとき、芸者がのつていた馬が、何かたまげて立ち上がったので、馬からその芸者が転げ落ちた。足でも痛くしたか、腰でも打ったか、その芸者はそこから帰ってしまったので、その坂を、その芸者の名前をとって、「ホダシ坂」と呼んでいる。

後の三人の芸者は、鉾山まで行つて酒盛りした。その時に、人夫の一人が小用達した孔から外さ出たところが、向いの山できれいな女が手招きしている。

「何だか、向いの山に女の人が立ってで、手招きしてるから、みんな出てみる」
て、音立てて中の人に言っているうちに、その山が崩つて、生き埋めになつて

しまったそうだと。その時に早く出て来た人だけ助かったんだと。芸者三人は生き埋めになったので、沢の名前に「クナイ」「サンカイ」「ヤイチロウ」の名が残っている。

その向いの山の女は山の神で、早く出ると教えてくれたんだという。

その上に、「ドウス沢」という沢がある。癩病患者は金神だといって、そこに埋めたもんだという。そうすると金が出るというたそうだと。また鉾山というのは七つの峰を越して行くと栄えるというので、田沢に降りないで、築沢の東に出るような道を歩いて、鉾石を出したそうだと。築沢東に「トコヤ」という地名がある。それは人夫の中に髪結いがいたのでそう名付いたそうだと。

6 魚 女 房

むかしあつたけど。

どこさ行つたときだか、子どもら、魚、何魚だか捕^せめていたどこ、助けて、そして家さ帰つていたら、よっぽど経^たつてから、きれいな女、

「泊めて下さい」

て来たど。いろいろ聞くど、

「いそぐ旅でないから」

て、長く助^すけて呉つでいたど。留守番などしてもらつたもんだから、親父喜んで、毎晩、ハラコ汁のお汁から何から拵^ずつて御馳走するもんだから、大變に、

「不思議だな、こがえなハラコなど買つて来て、おれに御馳走するもんだ」
と思つて見ていたど。そしてある時、

「ちよつと魚でも買つて来たいから」
て出かけて行つた。

「今日など帰つて来つか、帰つて来ねが分かんね」

と思つて来てみると、とつくに帰つて来ていたもんだから、

「魚買って来たか」

て聞いたれば、

「行ってみたげんど、なかったもんだから、買って来ねがったげんど、残りあんなだから、御馳走すつから」

て言うから、見る気もなく、料理場のぞって見たらば、さけ鮭のよに化けた体を現わして、一生けんめいに卵産していたど。

「ははあ、こりや、前に助けた魚、恩返すためにこういう風にして、ハラコ御馳走した」

と思つていたど。次の日になってから、

「ながなが御厄介になりました」て言う。

「そがえに帰って行かねで、いまちいと家にいてもらいたい」
て言うたば、

「おとうさんが、ゆうべ、おらの卵産すどこ見てあつたべ」

て言わつて、そしてこんどあ、その魚、前の池さドボンと落ちて、魚になつて

海さ帰って行くどこだったど。

(関場亥之助)

7 蛇 退 治

むかしあつけど。

殿さまに、「お前、あそこの山に大蛇いたから退治して来い」て言わった。

「殿さま、大蛇など、おれ、とっても退治さんない」

「んだげんど、お前でなく退治さんねから、村人困つから、お前でないど退治さんねから行つて来い」

「ほうか、ほんじゃ何とも仕様ない。大蛇に食れんべげんど、おれ行かんねごで」

て思つて出かけた。それで山の中腹さ行つて、こころ辺で一服すんべと思つて一服してだば、縦縞の着物きた若い男が傍さ寄つて来て、

「旅のお客さん、何用あつてござった」

「おれはここに住んでる大蛇退治して来^きいて、殿さまから言わつじやから来たところだ。どこらに大蛇いんべ」

「この山にいた」

と、その若者あ言う。

「なじよしたら退治されんべ」

「おれの考えでは、煙草のヤニをいっばい樽さ作つて、そいつをかけつど大蛇が死ぬそうだから、そいつをかけろと言うので、煙草いっばい吸つてたぞこだ」
て、そして背負つてた樽さポンポンとはたいてたど。そしたば、

「お前、きらいなものは何だ」

いろいろな話しているうちに、「おれは煙草のヤニは大嫌いよ。ほんじやお前は
何嫌いよ」

「いや、おれ、世の中で一番きらいなものは、金だ」

「そうか」

て言うて、そのまま別つて、そして煙草いっぱい吸つて、樽さヤニ、でつとり
拵えて、山の天辺てんべんさ登つて行つて待つてだば、大蛇出てきた。そして大蛇さかけ
て、

「ああ、ええがつた、ええがつた。大蛇さかけたし、こんでは死ぬべ」

と思つて家さ来て、その夜寝た。そうしたば夜中ごろ、ものすごい音立てて来
たど。何だと思つたば、自分が寝つた枕元さ、山ほどの金集つてだど。

「あれ、今日、若者と話したつて、一番きらいなもの何だつて、おれ、金がきら
いだて言うたつけ、そのとおり、何なごんだべ、こいつ、こがえなこと起きた」
て、考えてみたけあ、そいつが蛇に化けていたなで、おれにヤニかけらつたか
ら、こんどおらえのきらいなものかけだんだと、その男は大金持になつたけど。
んだから蛇退治に行くときは、ヤニ持たがつて煙草持つて行んこんだ。（関場）

8 姥

捨

年とった者捨てろと命令が来たもんだから、山さ年寄りを背負って行くとき、ずうつと考えて、考えて、

「何とかして、この母親は山さ投げたくない」
て行つて、そして、

「この辺さ置いて行くとええんだな」
と見たらば、その母親は、

「お前、道に迷うと悪れと思つて、ずうつと背負つて来るうちに、木の枝を折しよつて来たから、そいつ目当てにずうつと降つて行げ」

そして行つたど。ほして考えてみたらば、

「何たて、おれ、罪人になつたて、母は山さ投げて殺していらんね」

と思つたもんだから、世間の人に見えぬうちに連^せて来て、隠したところが、
「灰で縄をなつて出せ」

ていう命令が殿さまから出たど。はいつを、その母から聞いて出したど。

「縄をなつたな、そくつと上げて焼いて、そのまま持つて行くど、灰の縄なもんだから」

て、持つて行つたど。殿さまは、

「はいつは、お前の知恵でないがんべ、お前の考えでなかんべ」

て、示さつじやところが、

「実は、こういうわけだ」

て話したところが、それから年寄りだつて投げたりするもんでないということになつて、投げねことになつた。

（関場亥之助）

9 南の山の馬鹿息子

むかしあつたけど。

南の山の馬鹿息子いだっけど。嫁の実家さ行ったら、餅搗いてもらって、餅背負って来っどき、堀こあったので、ピンとはねたら、ピンになって、ピンピン、ピンピンと言うて来たら、こんど川あつて、川んどこ「ドッコイショ」と跳んだど。「餅、餅」と考えて来たの、そいつ「ドッコイショ」に、餅化けてしまったから、ドッコイショ、ドッコイショて来て、

「ドッコイショもらって来た」

て言うたど。

(関場亥之助)

10 まま子いじめ

むかしむかし、かあさんが逝くなつて、あ・と・め・か・あ・ち・ゃ・ん・貰・い・や・つ・た・ん・だ・ど。そしてそこに女の子あいて、その女の子、何とかして殺すとかすんべと思つて、自分の子かわいいもんだから、学校から帰って来っど、

「今日はヘラで萩切って来い」

「また、今日もヘラで萩、なじよして、切ったらええがんべ」

と思つて、その娘いた。そして行くと、じんつあがいて、鎌貸してくれた。そして切つて来るもんだから、また次の日も……。

毎日言われるもんだから、そのじんつあに切つてもらつてはあ、背負つて来、して来るもんだから、不思議だと思つて、かあちゃんが今度、

「ザルで水汲んで来い」

「ザルで水汲みなて大変だ。何として汲んだらええがんべ」

と思つて、その娘考えていたときに、またそのじんつあ出てきて、

「ほんじゃ、このバケツで汲め」

て、そして汲んでもらつてきたど。そしたば釜の上に萩の棒置いて、その上を渡れて言わつたど。

ヘラで萩切れどさ

笊で水汲めどさ

萩の橋渡れどさ

て、その娘、毎日その唄うたつて過ぎたど。

（関場）

11 猿 賀 入

むかしあつたけど。三人のきれいな娘いて、いたば猿が来て、

「おれに娘一人呉んねえが」

「ええがんべ。一人呉れつから大事にしるよ」

て、そしてもらつて餅搗いてもらつて、その娘は猿のおかたになるの嫌んだげ
んども、仕樣ないから、ほんじゃ途中で猿を川さでも入つて、おれあ戻つてくん
べと思つて、そのつもりで、

「ええがんべ、ほんじゃ、おれ、お嫁になつから」

て言うて、嫁に行つて、餅搗いて里帰りすつどきに、

「おら家の親たちが臼さ入った餅好きで、その餅御馳走すんには臼がらみ背負って行かんね」

て言うて、

「ほんじゃ、背負って行んから」て、臼がらみ背負って来たらば、

「あそこさきれいな花咲いっだから、あの花欲しいなあ」

て言うたば、

「とってやる。とってやる。んだげんども、この臼背負ってでは、とてもあの花とらんねから、ほんじゃ、ここさ置くべ」

その娘言うにや、

「臼そこさ置くと土くさくなる。そこさ置かねで背負って、とって来てくろ」

「背負って、よかんべ。背負ってとってくる」て。そして沢さ曲がったらば、臼がらみ川さストンと落ちて、その娘、無事に帰って来たけど。

（閑場）

12 藁しべ長者

長者さまの下男になつてた、仕えていたときに、「お前、家でいらねぐなつたから、旅さ出てもええぞ」て言わつて、その時藁一本もらつて出たわけだ。そうすつど途中さ行つたば、牛ひいた人が来て、

「この牛が大変腹へつてつから、ワラ一本売つてくんねが」

て言わつて、藁を売つてお金をもらつたんだど。そしてまた行くうちに反物屋と会つて、「反物買つてくろ」て言わつて、そのお金で反物一反買ったわけだ。そしてずうつと行くうちにだんだん金持になつて、藁一本で長者さまになつた。

（関場）

13 朝 日 太 郎

朝日太郎という、山より大きな男だったど。その男がうんと働きもので、働
きもので、日本一の働きものだったど。

そしてナデラ山を七畝・八畝にかえしたもんだど。んだからこういう畝が七つ、
沢が八つあるそうだ。そんで今でもナデラ山は、昔、朝日太郎の七畝・八畝でい
うたそうだ。早くねないと山より大っきい朝日太郎来っぞ。おつかねえから早く
ねろはあ……。

（関場）

あとがき

置賜民俗学会の昭和48年度の民俗調査は渡部勉氏の御努力で米沢市塩井地区で行われた。また昨年度は米沢市築沢地区であつた。私の担当は口承文芸部門であるが、調査に十分の時間がとれなかったためか、あるいは地区全体の保存状態がこうなのか、よい保存状態とは必ずしも言えなかったが、数の上から言つてかなり多い。また田沢にも渡部氏の好意で「木流し」のことを調査に行き、昔話と伝説を聞く機会があり、同時に収めた。話者の方々はじめ、塩井の方々、塩井公民館の方々に深く感謝する次第である。

昭和48年11月

米沢市塩井の昔話

昭和48年11月20日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三二―三
置賜民族学会

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年三月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四